

多久和 典子

石川県立看護大学健康科学講座主任教授

2006年4月から石川県立看護大学健康科学講座を担当しています。前任校（金沢大学大学院医学系研究科血管分子生理学分野）には1999年10月より6年半在籍し、我々が見いだした新規G蛋白共役型受容体のノックアウトマウスや、このリガンド産生酵素のトランスジェニックマウス、さらに別の受容体サブタイプのトランスジェニックマウスなど複数の遺伝子改変動物の研究に携わりました。その結果、これらの情報伝達分子が心肥大・心筋線維化、その他の病態生理学的意義をもつ重要なものであることが明らかとなりました。またがん細胞の細胞遊走・浸潤をがん細胞自身が発現する上記受容体を介して抑制しうることを大学院生らとともに初めて証明し、将来のテーラメードがん治療に夢を描いています。これらのプロジェクトには、共同研究者・大学院生とともに私も微力ながら今後もかかわって行きたいと念じています。

さて、我が国は、とりわけ女性に関しては揺るぎない世界一の長寿国であると認識されていますが、それは戦後の食糧難の時代を経験した世代についての現象であります（カロリー制限により寿命が延長することは多くの種で報告されているそうです）。飽食の時代に粥状動脈硬化を育成しつつある我々やその下の世代、ことに塾帰りハンバーガーのこども世代において、長寿国日本はもはやかつての栄光、伝説、あるいは神話になろうとしています。加えて、①未曾有の少子高齢化社会突入、②NEET、不登校、家庭内暴力、常識を逸した犯罪など、広汎かつ多因子に由来する精神的社会的諸問題の増加、③昨今の国家財政の危機

的状况、などを勘案するに、近未来のわが国を構成する人々の精神的・身体的・社会的健康度を深く憂慮せざるを得ません。さらに、最近の医学部卒業後研修制度の改変は、大多数の若者に内在する都市部指向傾向により、実態とは異なる評価に基づく「市場原理」を生み出し、堅実な地方大学からは潮が引くように研修医がいなくなり、地方では中堅病院においてすら、小児科・産科などの当たり前の診療の継続が困難となっている状況です。このような状況は実施前のシミュレーションで当然予測できたはずであり、これに対する対策を怠った当事者に対しては、義務教育における「ゆとり教育」の無責任な導入による教育荒廃を招いた責任者に対してと同様、憤りを禁じえません。さて、このように、北朝鮮問題に加えてさまざまな内憂をかかえるわが国であります。その中であって、生理学者はどのように社会貢献が可能でしょうか。この問いに対する答えは各々置かれた立場により当然違ってくることでしょう。私個人は、これまでに得た多くの恩師・先輩緒先生からの教え、同僚との切磋琢磨により培った内なる財産（もとより未熟にして寡少ではありますが）を元手に、近未来のわが国の健康状態を少しでも良い方向へと導く担い手の育成に貢献したいと考え、ご縁あってこの度の転任となりました。留学時代に下垂体腫瘍摘出術を受けた友人のお見舞いに行ってYale-New Haven Hospitalで目にした看護師は、当時にしてすでに医師と対等のパートナーといった印象でした。もとより、医療がscience and artに立脚している以上、看護師育成はartと並んでそれ以上にscience-basedであ

るべきであり、そのためには正しく、わかりやすく、面白い教育が必須であります。生理学に基づいた病態生理の理解に基づいた疾患の理解が必要です。さらに、一般人における生命への正しい理解を深めることが、長期的に見て一国の健康状態を改善することにつながると思います。そのためには、30億年を経て進化し多様化し、地球上に脈々と生き続ける生命の面白さ、奥深さ、遺伝と環境により因果応報の原理で形成される健康と疾病の厳粛な事実、これらを学童期から少しずつ、正しく、分かりやすく、面白く解き明かし、高等学校卒業時にはだれもが生命のしくみや健康・疾病に関して一定の知識レベルを獲得できるような教育プログラムが必要ではないかと考えています。これらの知識は生物学の知識のなかでもとりわけ重要度が高いと考えます。(実際米国の小学生はわが国の大学生より健康を維持するためにはなにを食べなければならないかについて知識があるかもしれません。それを実践できるかどうかはまた別問題ですが。)

新任校ではどの学生も明確で具体的な目標を持ち、医学科学生と同等あるいはそれ以上の優秀な学生も多く、励まされる一方で、そうでない学生もおり、後者のなかにも複数の「病態生理」があって一筋縄では行かないのですが、教室における learning and memory の研究は生理学者の重要なテーマであると最近実感しています。

略歴

- | | |
|----------|---|
| 1979年3月 | 東京大学医学部医学科卒業 |
| 5月 | 医師免許取得 東京大学医学部
附属病院内科研修医 |
| 1981年11月 | 東京大学医科学研究所病態薬理
研究部助手(三輪史朗教授) |
| 1983年11月 | 東京大学医学部第二生理学教室
助手(星猛教授) |
| 1985年1月 | 米国Yale大学visiting research
scientist(H. Rasmussen教授) |
| 1987年10月 | 東京大学医学部第二生理学教室
に復職 |
| 1990年7月 | 医学博士の学位取得(小腸・腎
上皮刷子縁膜におけるペプチド
輸送がプロトンとの共輸送である
ことの証明) |
| 1999年10月 | 金沢大学医学部生理学第一講座
助手(2001年から 大学院医学
系研究科循環医科学専攻血管分
子生理学分野) |
| 2006年4月 | 石川県立看護大学健康科学講座
主任教授 |